

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日
平成三十一年三月一日
特別換承認雑誌第六二七号
第百二十二卷第三号

ホトトギス

三月号



風雅の小筥〔十四〕

ホトトギス社

私は滅多に無いが、句会ではよくある一句に人気が集まり、互選でその句が圧倒的に選に入る。ところが得てしてその句が、その日の主選者には入らない、というののままある事である。最近ではあまり聞かなくなつたが、この場合、この互選で人気のあつた句の作者は、互選に多く選ばれた事に対しては全く無関心で、主選者に選ばれなかつた事に対してだけで落ち込んで帰る、という人も実際以前私自身目撃した事もある。最近あまり聞かなくなつたとは申し上げたが、皆無ではないだろう。実はこれは虚子の時代からあつた事で、かの赤星水竹居士著の『虚子俳話録』には「入選よりも互選」と題してこんな件がある。

この間の武蔵野探勝句会の後で、誰彼は零だ誰彼は何句入選などと、はしやぎ合つていと、

先生側から

諸君は、私の選に入ることばかり考えずに、もっと広くお互いの選に入ることも考えていただきたい。

誰がどんな句をとつたということは、大變興味あることですよ。

と言われた。(昭八・八・一一)

俳句は芸術作品である事を考えると、やはり名作というのは、ダ・ビンチの「モナリザ」やベートーベンの「運命」等万民に愛されているからこそ名作となり得たのである。俳句作品も、多くの人に句会で選句される、という事は、一つの名作としての所以だろう。

句日記 汀子

平成三十年三月三日 若屋ホトギス会

山笑ひそめし家待つも又楽し
雛飾り命惜みし人のこと

三月四日 下朗句会

人惜みても惜みても春寒し
言葉とは貧しかりけり山笑ふ
淋しさは言葉とならぬ春寒し

三月五日 ロイヤル俳壇

如月の悲しき報せ突然に
足腰に効くかも知れぬ二日灸
春の雲失せてどしや降りなりしこと
訃報とは突然に來る春寒し
大切なのは思ふ春の雲

三月八日 清交社

雛に留守頼む三日となりにけり
春めくと思ひし日々の後戻り
通り抜け来し雲雀野と気づきたる
海よりの風も春めくものとして
足腰に待たるといふ春めく日
春めく日家居勿体ないといふ
消息のなきが消息春めく日

三月九日 工業倶楽部

安心はまだ先のこと雪の果
蟻の道辿れば海に出てをりぬ
みよし野にはじまる花の案内状
蟻の道迷ふ心のある如く

三月十日 関東ホトギス俳句大会前日句会

晴れさうに晴れさうに晴れ春山路
春の雨止みさうに止みさうに止む
箱根越え春の季節の後戻り

三月十一日 関東ホトギス俳句大会

幾度も來たる記憶の春山路
春眠に委ねし旅となりしこと

三月十一日 関東ホトギス同人会

七年の歳月偲ぶ宿の春
旅といふ解放感も春らしく
景色無きホテルの部屋の春灯
三月十三日 大阪倶楽部

もの芽の何か分りしよりの日々
お水取済めばと思ふ旅心
暖かき日々の油断の旅心
ともかくも花の吉野へ案内状
ずんなりと駐車の出来て暖かし
火の粉浴びかしこまりたるお水取

三月十三日 綿業倶楽部

遠くより見て近づきて桃の花
強東風に旅路委ねてをりしこと
一枝挿しすなはち桃の節句かな
稿値を仕上げて桃の節句かな

三月十七日 ホトギス社吟行会

迷ふ筈なきビル迷ひ春寒し
この広き皇居半周うららかに
靖国の花の開花を待たずとも

三月十九日 朝日カルチャー

初花を見て出掛け来し雨催ひ
人悼む心に今日の花の雨
雨も又花をうながすものとして

三月二十日 有恒俳句会

六甲山霞の中にある所在
踏んでぬしとは気づかずに名草の芽
治つても治つてもなほ春の風邪

旅心春めく油断ありにけり
計画の先へ先へと花便

三月二十日 無名会

春暁の予報は雨と聞いて発つ
麗かに受けとめてぬし人生も
ある如くなき如くぬて麗かに
春暁や少し配慮の旅心
人悼む心を春に切替へる
麗かに雨上りぬし朝かな

三月二十日 富田楓子、道子夫妻(祝句)

美しく卒寿米寿を祝ぐも春
三月二十一日 夏潮句会
陽炎の向ふに旅路ありにけり
初花に冷たき雨となつて来し
東京は雨と聞きつつ初花に

人悼む心に花の雨もよひ
春の風邪まだひきずつてをりしこと
天候の荒るるはいつも花の頃
三月二十二日 きさらぎ会
暖かと思ひし昨日遠くして
まだ色を明かすことなき牡丹の芽
氣力持ち直し暖かなりしこと
暖かきことが味方をしてくれし

三月二十三日 アネモネ句会

春暁の旅立に慣れをりしとて
麗かな会話弾んでをりにけり
体調を整へねばと春めく日
うららかや会議終へたる心解く
春場所のひいきの力士又負けて
治りさう治りさうにも春の風邪

廣太郎句帳

廣太郎

平成三十年三月一日 蕉心会

春雷に東京の空入れ替る
大荒れの一転長閑なる都心
雪解水大川の嵩持ち上げて
春の川とは緩やかに滑らかに
幸せを奪はれさうな春の風
川うらら船音すれど船見え
鳥帰る思ひ出数多詰め込み
晴れてゆく早さ春塵来る速さ
日表の椿日裏の椿落つ
海猫鳴いて猫の恋路を囁し立て

三月一日 六甲会

殿の一羽来てより鳥雲へ
春泥を踏んで黒猫鬨に消ゆ
二重橋前春泥を許さざる
春泥を厭はぬ君のピンヒール
富士凛と伊吹は模糊と鳥曇
梅が香に招かれてゐる邸の庭

三月三日 芦屋ホトギス会

春雷に季節の頁捲る首都
穴道湖の第二楽章 蜆搔
雛納嫁ぎ行く娘の覚悟かな

三月四日 野分会 芦屋例会

蒜の香に鉄板の躍り出す
蒜やミディアムレアといふ香り
弱さとは強さ鮎子煮る嫁御
鮎子を煮れば磯の香醤油の香
鮎子に吃水深く入港す
三月四日 青嵐会 芦屋例会
飯蛸の地を走りゆく魚の棚

苜蓿揺らして離陸 複葉機
クローバの四つ葉摘むまで帰れない
三月五日 カトリック新聞選者吟
探梅の目を祭壇に移しけり
三月八日 土筆会

鎌倉の串にこだはる女将かな
ごみ袋三十六個大掃除
紅梅に染め上げられし雨滴かな
鴨引いて水面余白を広げゆく
三月十一日 関東ホトギス俳句大会

尊徳を偲ぶ言の葉暖かし
尊徳の世を照らしつつ春炉焚く
声うらら二宮金次郎の歌
七年の歳月重く涅槃西風
三月十二日 朝日カルチャー草句会

青き踏む地球の丸さ確かめて
春の川富士の裾野といふ嵩に
対岸は旅券必携 春の川
踏青や虚子の句碑まで八千歩
穴道湖の点描として蜆舟
三月十五日 北国文芸選者吟
耕を待つ土の香と土の色
三月十五日 登高会

さんしよのめ叩けば香る野の息吹
踏青の土柔かく迎へくれば
青き踏む大地の目覚め促して
稜線の尖つてきたる斑雪山
青き踏む地の吹きを聞きながら
木の芽和だけばは拘る漢かな

三月十七日 ホトギス社吟行会

北の丸公園 卒業生 屯
春愁の目差 吉田茂 像
蒼天に白木蓮の吸はれゆく
女学生 卒業 袴 翻し
三月二十四日 ホトギス社句会

大欠伸して春の山目覚めゆく
春灯下聖堂包むレクイエム
接木して蘇りたる一樹かな
春の山茶毘の煙の吸はれゆく
一本の接木に万の命かな
三月二十五日 青嵐会 東京例会

一樹初めて嘔き初めし花の精
散り初めてより饒舌となる桜
朝桜首都の目覚めを促せり
三門を潜るより花人となる
三月二十五日 野分会 東京例会
鮎子の釘煮振る舞ふ佳人かな
鮎子を指呼に鮎子煮る生活
六甲の香に一つの恋の終りけり
子午線の街鮎子に膨らめり

三月二十七日 若水句会
又一人逝く陽炎の彼方へと
春塵を許さじ君のスタインウェイ
春の雪軍靴響きし頃をふと
陽炎に一両電車歪み着くと
淡雪となりゆく富士の仔細かな
陽炎や東京ドーム宙に浮く
三月二十八日 目黒学園句会

耕や夕日に背を伸ばしつつ
屋根替す二宮金次郎生家
穴道湖の綺羅へ漕ぎ出す蜆舟
日の本の未来案じて耕せり
耕と祈りを糧に修道士
屋根替に北国目覚めゆきにけり
三月二十九日 徳源寺句会

富士川の嵩となりゆく水温む
己が影引つ張り出して物芽出づ
木の芽風関東ローム層を撫づ
温む水割りて命の飛び出せり
三月三十日 カトリック新聞選者吟
虚子生れし日と聞く訃音春寒し

雑詠 廣太郎 選

露けしや色の褪せたる鏡板 東京 山田閨子
 時に舞ふ桜紅葉や能舞台 同
 色鳥や百余年なる能舞台 同
 懺悔室へと置いてくる秋思とは 神戸 和田華凜
 秋の空てふソプラノの空仰ぐ 同
 白秋と言ひ赤もまた秋の色 同
 生と死の狭間にあへぐ露の息 長岡 安原 葉
 快方へ向ふ兆しか露の息 同
 露の身に管幾本も挿され病む 同
 隼や眼の翳り見逃さず 東京 田丸千種
 空遠く海深く隼の視線 同
 轟音が静寂か隼の空は 同
 秋声は宇宙のもらす言葉とも 福山 竹下陶子
 仏像の黙の秋声なりしかな 同
 花野とは氷河の痕と言はれても 同
 欠けに欠けまた欠け満ちし月今宵 東京 橋本くに彦
 鐘鳴るも鳴らぬも五山柿の秋 同
 三山のもみづる紅葉もみぢかな 同

初潮や祝太鼓は舞うて打つ 神戸 山田佳乃
 分れては出合ふ流れや下り鮎 同
 手も入れず小鳥の好きな一樹かな 同
 落球はあまりにも秋高すぎて 同 藤井啓子
 赤い実の名前を問へば小鳥来る 同
 山荘に売り値貼らるる暮の秋 同
 色鳥の神より賜ふ己が彩 同 涌羅由美
 しまなみを繋ぐ潮の香檸檬の香 同
 秋祭村膨らんで弾みけり 同
 秋風に這入り込むやう磴のぼる 岡山 伴 明子
 爽やかや空を自由に描く雲 同
 乱反射とは太陽と花芒 同
 白波のたちて琵琶湖に冬兆す 龍ヶ崎 今橋虞理子
 尼寺のひかげり易き枇杷の花 同
 黒松に端正にあり障子の間 同
 一刀の切込よりの破芭蕉 香川 湯川 雅
 時雨虹立ちしあたりが目的地 同
 凧や振向かぬ約束の道 同
 輕輕といのち吹かれてゐる野分 熊本 岩岡中正
 人逝きし空より雁の来りけり 同
 会ふ人のみななつかしき雁のころ 同
 雲ほぐれゆける早さや春立つ日 東京 今井肖子
 洋館の裏庭広しふきのたう 同
 とがりつつゆるびつつ春風となる 同

雑詠句評（二月号より）

道はこれから体育の日を歩む 神戸 立村霜衣

それまでただ何となく歩んでいたのだが、ふと今日が体育の日であることに気づいたことから、歩みにも力強さが加わった作者。その瞬間、何気なく歩いてきた道が実は自分がこれから目指そうとするものへ導いてくれる一本の道なのだと思感したのである。

掲句の「道」は、実際に歩んでいる今の道であると同時に自分の心に期して目指す道でもある。人はそれぞれ、人生という道を歩んでいると思うと、この句は誰にでも語ることの出来る一句だと思われてならない。

明るく力強く、しかも誰もが共感を覚える一句である。

（しげ人）

人生を道に例えるなら、平坦な道もあれば、険しい道もあるものだ。又分れ道でどちらを行こうか決断をしなければならぬ場所もあるだろう。それでも一生続く道は作者にとってはまだまだこれから長いのである。体育の日という躍動感溢れる祝日から作者の明るい未来への期待が見て取れる。（廣太郎）

心竹の一事も惚ぶ竹の春 長岡 安原 葉

「心竹」とは笹の葉だそう。虚子がホトトギスの運管に悩んで弱音を吐いたときに子規が笹の葉に朱筆で激励を書き送ったという一事があつたそう。その笹の葉は今も現存しており虚子館で展示されているとのことである。心竹というものに虚子子規の絆を思い、初期のホトトギスの刊行の苦勞が惚ばれるという作者。真摯にホトトギスを支えておられる作者ならではの一句である。

（佳乃）

虚子を叱咤する為に子規が笹の葉に句を認めたという心竹が芦屋の虚子記念文学館に奇跡的に現存しているのは驚異的な事ではあるが、その心竹のエピソードを知る作者の心持ちがしみじみと伝わってくる句である。秋になると勢いを見せる竹に子規や虚子の心持ちを重ね合わせているのである。（廣太郎）〈以下略〉

天地有情

廣太郎代選

虚子慕ひ来し西ノ下の露けさよ
 露の世に語りつぐ虚子物語
 観楓に舟を仕立ててくれにけり
 竹林に入れば秋意のおのづから
 新盆になるとしみみ君偲ぶ
 案ずるは子規忌の頃の師の多忙
 伊予と加賀訪ひ重ね来て秋惜む
 西ノ下の旅告げもして西虚子忌
 ひとつかみ足して重たき落葉籠
 はみ出せる炎は叩き落葉焚
 朝露に祈り夜露に祈る山
 冬薔薇真紅は抱くための色
 心して酌む平成の今年酒
 浅酌の相手せし子を偲ぶ秋
 今晩は月が出ますと団子来る
 坊つちやん団子それも供へて月祀る
 いま欲しきものに詩才と秋の風
 故人いま小鳥となつて来りけり

長岡 安原 葉
 同 同
 神戸 三村純也
 同 同
 相模原 木村享史
 同 同
 神戸 千原叡子
 同 同
 東京 田丸千種
 同 同
 神戸 和田華凜
 同 同
 西宮 本郷桂子
 同 同
 神戸 後藤比奈夫
 同 同
 熊本 岩岡中正
 同 同

蓑虫の居心地悪き出入口
 風の来るたび塗替へて真葛原
 ほどけ初むる時に最も濃紅梅
 乾きたる幹に苔むす梅二月
 一塊の雲も許さず塔の秋
 蒼天に塔軒の端に吊し柿
 吹かれても野菊は色を失はず
 一片の雲もなき日よ野路菊よ
 草を引く地球を少し持ち上げて
 雑踏にふと足止めて秋の声
 朱をちらとこぼし色鳥去りにけり
 日矢はねてはねてきちきちばつたの野
 拝観の間を時雨れたる庭に出し
 思惟の歩の人を避くれば小鳥来る
 ひと刷毛の雲が仕上げてゆきし秋
 校長がひよいと廻せる木の実独楽
 鶺鴒の端端叩く遠干潟
 二センチの段差にこけてそぞろ寒

神戸 山田佳乃
 同 同
 東京 今井肖子
 同 同
 奈良 古賀しづれ
 同 同
 袋井 湖東紀子
 同 同
 岡山 伴 明子
 同 同
 龍ヶ崎 今橋眞理子
 同 同
 香川 湯川 雅
 同 同
 神戸 藤井啓子
 同 同
 大阪 酒井湧水
 同 同